こころ，からだ，いのち

中野 重行　大分大学名誉教授
大分大学医学部 創薬育薬医療コミュニケーション講座 教授

連載㊳

この半世紀で変わったこと，変わらないこと，変わってはいけないこと

初心忘るべからず！ 不易流行！

●様変わりしたものと，変わらず続くもの

「半世紀」の時間の流れというと，皆さんの頭にはどのようなことが浮かんでくるでしょうか？　50年も時が経つといろいろなものが変わります。半世紀前のわが国の医療では，手術可能なよほどの早期がんでなければ，患者にがんという病名を告げることはほとんどありませんでした。がんは死に至る病という印象が強くて，本人の闘病生活にとっては，知らないほうが何かと良いだろうという，いまから考えるとかなり独りよがりの思いやりから出た慣習だったように思います。治療の現場では，ビタミン欠乏症でもない患者の多くの不定愁訴に対して，ビタミンB_1大量療法が国内の至るところで氾濫していました。医学部卒業と医師国家試験に合格するまでの間の身分の不安定な時期には，臨床各科を廻る1年間のインターンと称する卒後臨床研修制度が存在していました。

半世紀経った現在，医療の現場は大きく様変わりしました。特に目につくのは，画像診断（CT, MRIなど）の技術革新です。血液生化学検査の項目も増えました。診療録は電子カルテ化されました。脳死が認められ，臓器移植の種類も増えています。文書同意も一般的になりました。がん切除手術を必要としない粒子線治療といった最先端の治療技術も開発されました。医薬品に目を向けると，新しい薬が次々と開発されました。たとえば，H_2受容体拮抗薬やプロトンポンプ阻害薬の開発により，難治性の消化性潰瘍は手術する必要がなくなりました。医療機関内で，倫理委員会やIRB，リスクマネジメント委員会などの活動が日常的に行われることは，半世紀前には想像もできないことでした。iPS細胞による再生医療の臨床試験が始まり，これからの医療はさらに大きく変わろうとしています。

私が専門にしてきた「臨床薬理学」と「心身医学」は，いずれも半世紀前に新しく誕生しつつあった学問領域でした。この半世紀の半分以上勤務している大分大学医学部（旧：大分医科大学）は，まだこの世に存在さえしていなかったのです。治験を含む臨床試験の領域では，GCP，臨床研究に関する倫理指針，CRC，SMO，CROなど，すべて新しく誕生したものばかりです。日常の生活場面でも，携帯電話，スマートフォン，デジカメ，DVD，パソコン，ハイブリッドカー，新幹線，飛行機など，科学技術の進歩による恩恵を抜きにしては，いまや快適に過ごせなくなっています。

一方で，医療の中で全く変わらず続いている風景もあります。最たるものは，医療の中にある「患者と医療者の間の人間関係」です。科学技術と医療機器の進歩や人工的な環境が増えた分だけ，相対的に人間関係が希薄になった感じがすることがあります。しかし，「助かりたい，楽になりたい」という人間と，「人間として，人間を助けたい」という人間がいて，ごく自然に生まれた営みが「医療の原点」です。したがって，患者にとっても，医療者にとっても，患者の話をよく聴き，わかりやすく説明し，患者に心からわかってもらうことは，半世紀を隔てた現在でも，全く変わらずに必須となる行為です。

なかの・しげゆき　岡山大学医学部卒。スタンフォード大学医学部臨床薬理学部門に留学。大分医科大学臨床薬理学教授，大分大学医学部附属病院長，大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬医学教授，国際医療福祉大学大学院教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員（元理事長）・専門医・指導医，日本臨床精神神経薬理学会名誉会員（元会長），日本心身医学会功労会員・認定医・指導医，日本内科学会認定医，臨床試験支援財団理事長。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として，医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ（大分，岡山，東京，長崎，山形）の企画・運営に携わっている。
http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/index.html

●級友との再会で浮かんだ二つの言葉

「大学卒業後50周年記念同窓会」が，この春，母校と母校のある筆者の育った故郷で開催されました。医学部は一学年がまだ80名の時代でした。2割弱の級友は，すでにあの世に旅立ちました。生存者の7割強にあたる49名が出席しました。健康を害して来られなかった友もおり，これが最後の同窓会と覚悟を決めて出席した友もいました。郷里で医業を営む今回の世話人となった級友たちの粋な計らいで，皆が学生時代に，本格的に医学を学び始めた初心の頃に，毎日授業に使っていた古いレンガ建ての教室（現在は講義室ではない）に土曜日の午後から集合して，学長の近況報告と意見交換，2名の医学生代表の現代医学生生活に関する発表と意見交換を行うところから，同窓会記念行事が始まりました。麻酔科医で米国在住の友も，久しぶりに帰国して，意見交換の輪に入ってくれました。その後，医学部と附属病院内を見学しました。

ホテルに移動してからの懇親会では，まず亡くなった友へ黙とうを捧げたあと，前回同窓会の世話人代表が務めるという慣習に従って，昨年（2014年）別府で同窓会の世話人を務めた筆者が乾杯の音頭をとり，開宴となりました。乾杯の際の筆者の短い挨拶では，すでにあの世に旅立ったり，闘病中であったり，リハビリ中であったりして残念ながら来られなかった友の気持ちに思いを馳せながら，出席者の気持ちを三つにまとめてお話ししました。本日参加できたことに対する感謝の気持ち。残された人生の持ち時間を社会に役立つ形で還元したいこと。社会にとって真に有能な人材を育成するという意味での母校のますますの発展を祈念したいこと。この三つの思いを込めて，杯を交わした次第です。

翌日の日曜日は，朝から，観光バスで2年間進学課程を過ごした全国で2番目に広いとされている大学キャンパス内で，様変わりしたり，あるいは面影のまだ残っている風景を，久し振りに案内していただきました。その後，夢二郷土美術館を訪れ，日本三名園の一つである岡山後楽園を市民ボランティアの観光案内付で散策して，解散しました。

「懐かしかった」「同窓会に来れて良かった」といったポジティブな感想が，多くの友の口から飛び交っていました。この卒後50周年記念同窓会に出席して，筆者の頭にごく自然に浮かんできた言葉が二つあります。この二つの言葉に表現されている思いが，誰も言葉にはしていなくとも，多くの友の心の底に流れていたことが，半世紀前にタイムスリップしたような一時を過ごして満足感を満喫できたことの最大の理由だったように思えます。

頭に浮かんできた一つは，「初心忘るべからず！」という能楽の修行について書いた世阿弥の言葉です。何事においても，いかに経験を積んだとしても，常に始めた頃の謙虚で真剣な気持ちを忘れずに持ち続けなければならないという戒めの言葉です。

もう一つは，「不易流行」という松尾芭蕉の言葉です。俳句は十七音という世界一短い詩であるため，常に新しい表現を心がけないと陳腐な句しかできないので，絶えず新しさを追求して行くことが「流行」です。「不易」は，俳句として存立する不変の条件（五七五の十七音の形，季語の存在など）となる原則を守り抜いて維持しようとすることです。医療の世界にいても同じことで，「不易」と「流行」の両方を意識して生きていくことが，何にも増して大切なことだという思いを，新たにしたのでした。